

特別養護老人ホーム入所者への家族の面会に関する研究

－特別養護老人ホーム A 苑における家族面会簿から－

岩泉町社協指定居宅介護支援事業所 岩澤 竜司 (8330)

キーワード：家族の面会、家族、特別養護老人ホーム

1. 研究目的

多くの実態調査から、高齢者は施設入所を望んでおらず、できれば自宅での生活を継続したいと思っているという傾向があることが明らかになっている。

では、すでに特別養護老人ホームへ入所した入所者にとって、継続したかった自宅での生活を想う時、現在の施設での生活と以前の自宅での生活をつなげてくれること、それは家族の面会であると考えるのである。

したがって本研究では、特別養護老人ホームにおける家族の面会に焦点をあて、特別養護老人ホーム入所者への家族の面会について研究することとした。

2. 研究の視点および方法

協力が可能であった特別養護老人ホーム A 苑（以下、A 苑）の 5 年間の面会簿を基に研究を行った。

A 苑の平成 19 年 4 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日までの入所者 50 名に対しての面会を、面会者である家族が自ら記載した面会簿から、50 人ひとり一人の月毎の家族の面会回数を拾い上げて明らかになったデータを基に A 苑の生活相談員からインタビューする方法で研究を進めた。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し対象者を匿名化しプライバシー保護に配慮した。

4. 研究結果

A 苑における 5 年間ににおける入所者一人当たりのひと月の平均面会回数は 3.167 回であった。また、平成 19 年度の一人当たりのひと月平均の面会回数は 3.377 人、平成 20 年度は 3.375 人、平成 21 年度は 2.841 人、平成 22 年度は 2.847 人、平成 23 年度は 3.296 人となり、入所期間が長くなっても概ね家族の面会は回数が減ることなく継続されていた。

しかし、年間の家族の面会回数が 302 回という入所者がいる一方で 1 年を通じて面会が 1 度もなかった（平成 19 年度より）入所者がいるという結果が出た。

5. 考察

ひと月の平均面会回数 3.167 回をどう見ればいいのか。A 苑の生活相談員の、「特

養の入所を待っている、所謂、入所待機者は大勢いらっしゃる。しかし、入所の順番がやっと来たにも拘らず入所を断る方がいる」という話しかから考えさせられるところがある。A苑の入所者の平均介護度 4.24 からは、入所前の家族の介護負担は重かったと想像される。常時介護を必要とする被介護者が大半であったのだろう。しかし、それでも被介護者を入所させたくないという家族の想い、やはり施設には入りたくないという被介護者の想い、それぞれの心の葛藤が想像できる。やはり被介護者も介護する家族も悩みに悩み抜いて施設入所を決断するのであろう。

そのように考えると、逆に重すぎた介護から解放させた家族にとって、ひと月の面会回数 3.167 回は少なすぎるのではないかと考えてしまう。しかし、萩原は、「在宅の老親の介護を担う人びと（その 8~9 割は女性）は、老親介護の発生とともに仕事をやめたり、仕事を変更したり、さらには、自らの生き方を真に選択することのできない状況がしばしばみられる」（萩原 1985 : 350）と研究している。したがって、被介護者が施設入所すると同時に、家族は元の自らの生き方に戻ろうとするのではなかろうか。

A 苑における 5 年間の面会の記録から、おおむね家族は定期的に面会を続けたことが分かった。これをどう評価するか。先ほど、被介護者の施設入所と同時に介護者であった家族は元の自らの生き方に戻ろうとするのではないかと考察したが、もし、そうだとしたら、元の自らの生き方を取り戻した家族は、その忙しい日々の生活の中で、入所者へ定期的に面会する時間をつくっていると推測する。これには、入所者と家族の、家族としてのつながりが辛うじて保たれているという印象を持つ。

最後に本研究では、他の入所者への家族の面会を見て「自分には面会がない」という不満をスタッフに溢す入所者が 2 人いた。一人は平成 19 年度の年間の家族の面会回数は 4 回と少ない。もう一人も 19 回と多いほうではない。この辛さはいかばかりだろうかと想像してみた。

要介護状態となる。これだけでも辛いことである。さらに自宅での生活が難しくなり特別養護老人ホーム等の施設入所となる。さらに辛さが増す。その施設での生活において、他の入所者に面会があるのに自分には面会がない。さらに追い打ちをかけるように辛さが増す。特別養護老人ホームのスタッフはこの入所者の辛さに対して無力かもしれない。しかし、この現実を分かろうとして入所者へ接することはできると考える。この入所者の辛さを承知するだけでも、今以上に介護や相談援助を通して優しくなれる筈であると思うのである。

文献

- 萩原清子（1985）「社会福祉と距離—老人と家族の『共存』を求めて—」『季刊・社会保障研究』20（4），350-364.